



美しく舞う蜉。蜉を見るためには、幼虫のエサとなる巻き貝がすめるきれいな水や、羽化した成虫が身を隠せる茂みがあることなど、いろいろな条件が必要なのです



よなかふしぎわ
世の中には不思議で分かりづら
いことがたくさんあります。自然、
科学、歴史など、詳しい先生に解
き明かしてもらいましょう。

生き物がすみやすい 水辺ってどんな所？

そろそろ蜉の季節になりました。蜉の幼虫はカワニナなどの淡水性巻き貝を餌にして成長し、時期が来ると水中から岸辺の土の中にもぐりこみ、そこで蛹になって羽化し、土の中から出てきて空中を飛び交います。

蜉を見る事ができるといふことは、蜉の餌となる巻き貝がすめるきれいな水があるといふことだけでなく、水辺から近い場所に土があることが必要ですし、羽化した場所からそれほど遠くないところに成虫が身を隠せる茂みがあることも必要なのです。私たちが生活するのに、台所や居間、あるいは子ども部屋が必要なのと同じですね。

植物や石も関係
川や河原の自然も同じよ

うに、多くの生き物たちの生活と、関わっています。例えば水際の植物の茎は水中にありますが、たかさ

の茎が水中にあることによつて、水際の流れは川の中心部分より緩やかになり、小さな魚たちが生活できる場所を作っています。

また、川の中にはたくさん石がありますが、それがあることによつてさまざまな水の流れ方が生まれています。石裏の流れが弱くなる場所に巣を作る水生昆虫もいます。大雨で川の水が多くなると、小さな石は川底を転がって流され、水生昆虫のすみ場は壊されますが、水が引けば生き物たちは新しいすみ場を見つけ、たくましく生活を始めます。

このように、川を「水が流れているところ」と見るのではなく、「生き物たちが生きている場」と見ると、これまでと違って見えてく

るはずですよ。

見方を変えて探点
環境省は、ここで紹介したほかにも、いくつかの見方で川をみる方法をまとめ、「水際のすこやかさ指標(みずしるべ)」(http://www.env.go.jp/water/wsi/index.html)として紹介しています。ムジでは生き物のすみ場のほか、川の水量や魚のすみやすさ、水のきれいさなど五つの見方から、その場所の点数付けをすることもできるようになっています。

梅雨が明ければ夏休みです。川や河原に出掛け、「みずしるべ」を使って身近な川を見直してみたいかかでしょうか。いくつかの川を比べて結果をまとめてみれば、楽しい自由研究になるでしょう。(山梨大学院医学工学総合研究部国際流域環境研究センター 生命環境学部環境科学科兼任 教授 風間ふたば)



水際のすこやかさ指標(みずしるべ)

環境省 水質調査所 水質調査所 水質調査所 (2009年)